



39-8144

目次序

たゞしてふうと近頃かあはまめのわが行先  
とも今の世人、よき用ひるもれどあるふるもあらず  
やまとももくじも同じ事とぞおもふくせゆらぎり  
されどやまと國にうほへ極く奈甚品もありふ  
たゞとやまともむくじはかどまられぬや小物のう事と  
五代の祖より此大江戸に住て國のものはこをひつり世の  
よしと歌せざとかく盛なるにすこしてちを南へ  
家ともりやまやまふとまハ近き年其輩多く公了

あひまつみ貢物残りをもよほの数をも定めを以て  
もよほと上るよりいじ侍へぬ事はなしの世よりあく  
天下五のた割り外ふうても此とく程益ひがな  
とげよつれの國あくも果を用ひぬ人きかくもて北東の  
宮とも遙か遠き島ともあくまことほすぬもとお徳を  
あして其身を害へるのうおちどなん又ちび國の人も  
腹もひん労れども忘き憂ともふくさむ徳あつてか  
らむくもひそ年々此をすそひの業行事にこそばて  
おのう世小なりで公小貢物をさけまつてこまつて頃よ

序一

汚許りあてやもよしまほの數をも定めを以てもよほ  
ゆくゆくの御子主といふふのれりゆくまといふ有るを  
御恵もまん阿まくまくア就きえのまくらうが物づけよ  
かくらひそめともやもく御あひなづかく侍へむるれ  
あ一等あく其功と害とを事もほくよすをもくし、故  
磐水大人のえ筆ふくとく書やく甚故くとくと故  
文字にこそ世のまくもべをみよも知らぬてくと  
思ふまくもべを大くよもまれへるともくとく

ヨリの同人ノ一ノ事と云ふ事は既に久遠也未だ之を記す  
機末よりあつてつゞけりとくとよほんへとけりて  
は艸の本性をもとより又此葉生長する所ノ如れも  
空ちよどき此功徳をもととおもなむ吸ひ止むし  
樂のとくを世の大なる益ならずもと耶素よみておう家  
代へゆきあらはるる事無くもと耶素よみておう家  
心すかくものぞむる所にはあまぬ文化十二年三月  
の事に清中亭の主叔親也

目録

発端

古今形勢

傳來諸説

考證雜話

本朝食鑑煙艸の主治抄錄

和蘭煙艸の功能 潤死を救小法并圖

唐土吃煙主功

和漢煙毒を解の方

禁忌 唐土和蘭

吃煙古式の圖

清朝人吃煙圖 同阿片もとを吸ふ圖

和蘭人食煙圖

印度人卷すをこそを吸ふ圖

奴婢よ長煙管を持せる寛永中の圖

出羽の民間よ得る鐵煙管の圖

浮世又兵衛う画する煙筒の圖 并寛永の頃の煙盒の圖

和漢煙店招牌の圖

古今利焼やつうの圖

大高子葉竹きせらけの圖

目さまし草

發端

舊錄を我師磐水大人未だ若らず時和蘭の書よたゞこの始て生出一國所を見出しこそハ即ち產地の名少して草モ地名を以て世よ通稱とありかく世界又弘く濫觴の的證を得給ひてより和漢傳來の事ぞくづく集々を志し給ひて多くの書籍どものなづか此草の事といふものとはあざぐく抄錄して編集し給へるなりことゆえ此草功もひく又害もひく事をもろに給へれば人々心得おきて益ゆる書なりとて往年其門よ遊むる輩櫻木よゑくて其家よ藏せしなりかくて此をを見つむ人び多く免ぐあまよまでおえひるまづきものといふも少くばしもー其

書の真名書なれどよまんとされど幼童女子又男も漢文讀な  
きぬ人ふをえよみと書きしれどもてあるをと書き書をとれく  
おもよとやせうんやうと假名文よきとておと乞ふもの多きあよ  
うび大人よ申て彼書のなうかる草の來由ありもぐら功能禁忌が  
どもきて簡要なる事を抜萃し又正編を木よゑり後小モ  
うち得られしをむろひりつやわき給へる卷のなうよも其要なる事  
どもを擇りうれしきと綴合て此うな書の草紙となしてかう小目  
さまく草とハ名はけつありやまく艸をつねるものともちく従じ萬  
葉集を始として又俊賴朝臣の 徒々の森の下よこそそちくまく艸を  
うべあらとよまれト奇がどよよとバ祐すをさぬそのふうそひくめ

此うぞとふもの人々つひよまひあぐもそのことのをとをあうざれぞ誠ニ  
祐するて物をよきまくぬよ似うきるを此説をきくよハ始を夢のさゆ  
らん心地やもん又悶ととく憂を却く効ひることハ目さぬし艸とつも  
んセつけなうドとて此卷の名よおほせつるよなん

### 古今形勢

たむこといふもの異國よりも一傳來せりと二百年よひまづく  
久しきながらばとなりぬれバ世の人貴賤ともよ其謂をも知らざる  
むことかくらむあるあくがよて今ハ却くひととてハとてひあぐく  
まことよ酒さけ水みず茶ちゃよもあくるものよなんきを手と口とよ離はなきを志  
をしきくらむよあつねハ事ことうくるをしげても飽あま食くをばく

しめ醒さむをバ多たゞ先醉えバさまだと世よのと人たなて此功德こうくごを知し世鬼せういの  
かかきき所ところとして此草このくさを植うぬうななく人ひとととて此葉このはを嗜くまぬうろく世よ行はきて  
年曆百年こうりひゃくねん小こも及およしよああららやひよよ詩し小こ也賦ふ一歌うた又また詠えい  
稱美めいびして止止其そのの德わざをほんよハハららささをを忘われ寒さむをを  
ああののぎ夏なつのの日永ひながの眠ねうちなるなるををきみ春はるの曉あの覺おき夢ゆめをを  
ああののぎ夏なつのの秋あき冬ひの夜よああき老おが身みの神かみづづきき小こハ從つ者しゃ女童めのわらわ  
ををどどくくのの吸く小こ火ひハハららややと問たずひひててよよむむききを助すけけ  
心こころああひひを喜よび又また何なにれれと物ものかかななききうう紀きををももれれららる  
身みののううききびびききをを立たののががるる邪よと戯たむむれれららる  
草くさともとも知しららままななすするる人のひとのの口くちををききるるアリ。

昔むかし誰だが寝覺ねざの床ゆののききししを忘わる草くさの種たねををままききさんと  
ひひるるももききることあり又また貞てい桺くわいといいるるもも狂きょう歌うたとと雲くもと見見る芳野よしの  
たたががこののううををううちちののひひをを立たののががるる邪よと戯たむむれれららる  
わわくく又また親おやしし友とも友ともよよききつつひひてて舊きききををかからひひつつるるやや  
ああききくくてて其そのももああきき小こ似そううとと山海さんかの珍味ちみををつく  
せせる酒宴しゅえんののむむいいふふもも時とき々ときああれれを吸くざざとと物ものくくぬぬ心地こころをを又また  
野の邊べの遊ゆび川かわせせううそそ月つきの前まへ花はなののとと酒さけのの後あと茶ちゃのの紀きややもも  
おおの煙えををくくるる兩ふたよよ對たいしし雪ゆきを賞たましし閑窓かんそうののうちうちよよぞぞううききをを吸くふふよよりりよりよりて物ものかかううぐぐるる折たわわくく又また旅たゆゆく朝あ戸と出だよよたたをを吸くふふよよりりののかかる趣おもしろ又また家いえののうちうちよよひひつつてもてもひひややふふくよよ事ことああげげき

あはれむをひきまひくもひくもんとなくぞねほゆる憂よ  
はけ樂しきよつけてもあきを伴はざれを悶る氣もむづび  
嬉しき心ものびざるがごとく近き世の人のちいのやくとそ  
西行の秋きくもとせなき世うかとひしもさることご  
くしもよ此物世よひまひくもはめあり人ぞ家びとア  
用ゆることよなうてを客人をもてなもふもつ前よ是を  
進むるを常のむらばとをることよなうむすりもじもか  
れどそれのみふとの御製とそ

もううくひまかく従ふをあくきなみある人のあふとをあむ  
とあまを給へりとくあく妙法院の宮の御言葉とてたゞこア  
七の徳ひりとのあひとものを見えうを又もみこし人を一名を  
相思草とひて人をうびあきを吸ひときを朝夕思ひあれ  
て止ときなとれんとあむとくあもひやしきあで人のをばる  
草よあとひもられ

傳來の諸説

當時慶長のひひご異國人のあよ往来ひりく頃もとゆく其  
種子とうゑーとを又乾らる葉を巻て管のあとくふ一頭よ  
火を點べ一頭より口を吹て薰服するあくと猶存しより以前の  
事なるをくさてを傳へ始むハ明の萬曆の頃偶々  
を服する者ひり崇禎よなうてを頗る者もわざわざとなん

又韓人の著せる書より近歳始て倭國に出と説き張氏が書ふ  
朝鮮志よりどりて見つと載るを以て考むべあくより朝鮮よ傳へ  
りとありと傳へりとぞもりゆくやうふも聞ゆ又明の末初て  
西洋なる人其種を中國よ帶び来つるといへれど説をされ  
彼より直よ受傳へ又彼より我東方よ傳へ物又西よ轉  
じてあくより朝鮮唐土へも傳へりと和漢大抵其時世を  
同うして都て我國を唐土よ先づくる歟とも拘てもる何よあれ  
貳百餘年來の事なりたゞこといへる名を世鬼のとぎり  
何との地ある事も通稱とかくられども傳來のとくを考む  
るきの異名をよび延命草長命草の類ひよひハ丹波粉



万治寛文の頃の物語にて  
作を設ける図なり  
雜話中は本文を  
出も

吃煙古式の圖

万治年 謂諧毛吹草より印本

雜説中は本文を  
出も

方治年 詹印本 詠諧毛吹草子

忠 爹

A black and white woodblock-style illustration of a man in traditional Japanese clothing, possibly a ronin or traveler, holding a sword hilt. He has a large mustache and is looking slightly to the right. Below him is a smoking pipe and a small object.



清朝人吃煙圖

竹煙管を把ハ下官あり

左の圖ハ清商阿片煙を吸ふ状なり。阿片を交へるたゞと短焰管より盛り燈火にて吸つて臥床よ臥して心を鎮め吃ひ服もるあち一炷香の間を其廻りを圍ひ人を拂ひ開かれて二三度も吸つたりそれより起き出れば睡眠を催せしとあく徹夜の作業も出来るとあくされ夥長と船中案針の役を勤め昼夜風候方位等を辨する者と主る人のあを所あり但一度此法を用ひ卒々止るときも其身も害あると上陸の後旅館よ在の間を折りこむと薰服もるとあり長崎の荒木氏目の所あり見しと圖して贈り

按する印度地方にてハ阿片一味を薰服する風習あり吸ひて後暫時昏憚せども服後精神快爽通夜眠を催せしとあくはれどもよく遠行など隨意にて其葷藥もむこと限まつてとぞ大人の紀聞せるものひづ瓜哇俗好啖阿片不至昏醉則不已と白石先生の著書も見えしとあるが此阿片煙も彼より傳へ  
轉法なる。此婆沙律陀婆闍煙藥陸地生も四分律と云ふと煙筒を作て煙を用ひ不す煙を喫て疾苦なし是故に今之烟草とあらず若阿片の類あるも外の薬也後の考である

和蘭人食煙圖

奴隸烏鬼銀盆より壺と手爐  
とを載て側よたす



阿片たばこを吸小圖



昆崙奴象を御かづ  
卷たをこそ吸ふ圖

あれハ文化癸酉の夏  
長崎へ舶来北象の  
写真なり



長崎荒如元画

多葉古等のひて字を通用し又誤りて蓑若を以て或  
よりそくごひおほく煙草の名は始て姚旅が露書とひ  
きのよ見やといへ松錦里先生の考す此名も李太白の想  
思草如煙といふ句より出るをいさか醫書より本草洞  
詮とひ書より始て煙艸の名を出せど其書ある渡みて後も  
雅俗ともよ皆此文字を通用する事とならず松其書より能く  
功と害とを辨せど猶其前後の諸書より詳ふれを説き示せ  
ど亦少なうべ

李氏の食物本草綱目より傳來の説を載せていハく彼より南より  
くる海外よ鬼國とひゆの國ひち其地みくも病者

ひりてあらへんなりやく時ときハのまゐよときのせて深山みやまに捨する  
そし乍さらとを昔其國わきそのくにニ一人の婦女ふじよひりて重ひき病やまひをもぐり人ひと  
一いちを例れいのまく山さんの奥おくよかきまく人々立たつ歸かへるをぬ其婦女ふじよ夢ゆめ  
のまくひりてうちえぬ香かのあけるまよ忽こゝちりをむきて  
ひりて見みつるよひまど見みあきぬ草くさ生なひあげどすはひよすく  
うれを嗅かむをもち身みのまく清きよくまくやうよ覺おぼえ今いまま  
病病よむき居ゐくよ夢ゆめの覚おぼりまくまく一身ひとまくやうに  
まくよくなかよしを己おのなりやう中なかよあよ捨すられ事ことまく  
ウそうそを取とりそをりまぎ下くだそ我が家いえニ歸かへるをぬ家いえある人々  
まくの物語ものがたりをきそそがひゆうひゆうき樂うきなりとてやがく  
其草くさを得とて世よ傳つへた即そちとひりとつづられ假まよ作つれる  
説せを取とりそ又また同じき別べつ説せニ南みなみ蠶國むなみくにニ一人の婦女ふじよ行ゆ  
名なを淡婆だいば姑ごとひ數年いくねん疾やまいの疾やまいを患あへたと此草くさを服はして  
全く瘳とる事ことを得とれぬ此草くさを淡婆だいば姑ごと呼よひとひへ  
思おもふこれこれとの字音じおんを填うし字面じめん女めのよ从ない婆ば姑ごといひ二字ふたじ  
ひるよよりて女の名なを附つ會むすびし設つくける妄もう説せなり  
和蘭わらんの書かきによよて萬國まんこくの事ことをかんづけよ此との北きたのひをもと  
洲しまとひ世界せかいニタバゴタバゴとひ小島こじまひり其地そのちニ生な出し草くさなるもとと  
貳に百十餘ひゃくじゅうよ年の昔むかしうろつうろつとひ世界せかいなる某まことにの物ものニコットニコットと  
ひる人ひと其島そのしまの産うぶをどう出だし携たて其國そのくにニ歸かへるを移いだくよ始はじまて

夫より其世鬼は傳へあきよりして東の方。ひどひ。といふ世鬼を  
傳へつひよ其内に属せる東の又シハアの國と云ひてへキ  
傳ノ數年がくにして今ハ世鬼のうござニ西より東より南北のまゝく迄  
ヨリ海より國の内地ハシマアシテは属せる遠近大小の島々と  
いへどもあきを用ひざるものもあく名ハ皆たゞこと稱せり。トモ  
これぞ此の傳來の的證なりける。

扱わんと近くの國々ふても煙を吹て樂となせる習ひも同様  
なれども漸々草の性味を考へ其醫書の中ハ内より服し外より  
用ひて種々の経験を取らる諸方法もおほ。其方法或ハ青汁を  
えぼす取或ハ油をとり灰をとり或ハ塩精を取て用ひ或ハ鼻煙  
を一味粗末とすて鼻より嗅て頭脳なる病を除き又諸方  
剤も配合せ諸病も充て用ひるを少なづれば今これを知る  
此書編集の功と新譯の成りとよ因るなり。今始めて藥功  
ある事セリ。之けて世々遍く蔓延常用のものとなり上ハ又別  
らくの製法を施して醫療も廣く用ひまき事ぞ。

### 考證雜話

此邦より此物の種を傳へしを慶長十年巳小して肥前長崎櫻の  
馬場より始て植つけしといひ。松醫官坂上池院の家より慶長年間の  
私記數卷よりて今より傳來も其慶長十二年の條より云々此項た  
れどりふものちやあきハ南蠻より渡ると云ひて葉をきば

犬をほげるもりとのむ云々又十三年十二月の條云云二三ヶ年以來  
たゞことりての南蠻より渡る日本の上下専らあまとを貺ぶ  
諸病を愈すと云然きども此頃うまとを吸ふもの病を發する  
あとひりといども醫書云此療法す故に藥ハアマガニ云々と  
いづ此兩條の説よりと貝原氏の書云慶長十年種を植付  
しとゆるものアマガニ又東野山人の著書卷の廿一云慶長十年今  
年蠻人の船より煙草を載せて来る其子を種ふるやゑ京師の  
人争ひ吸ひて遂に天下満なり云々いつるやもひと此説を據  
卷たをこのアマガニ云々と見ゆ卷  
アバニ元亀天正の頃よりと専用ひきもみと其前後遠  
くモ用ひるをかひる近頃アマガニの話云越後出雲崎天正十七八年  
の頃の檢地帳を見つむよと云何某といふ名を載すアマガニ  
古き事なりといひきも云々と刻むとあくまでもうれ  
なれば彼船より持渡る物云々と云ふ  
何きの世界かても漸盛焉ナリ後ハ木石の類を陥りて刻むたゞ  
と盛ニこれより管を施して吸ひあらをあらか後ミハ磁器金銀  
銅鐵等あくも作より名ハ國シヨウトムカタノガタアマガニ唐土小  
てを煙管煙筒と名づく此邦アマガニハ昔よりアマガニと云其草も吸ひし蠻國よ  
此とも先輩の考云蠻語アマガニといひ其草も吸ひし蠻國よ  
と傳へ云ふ也アマガニ但何といふ國の語アマガニと海外諸國の

書をもとて搜て此名を索しよもよ似る語か和蘭人の用する  
磁器の長管を名づけて「ラム」といふ其名似もつば又いもる  
南蠻と稱せる國々にてハモイバとひそく然モバ昔あれを傳へ  
頃他の蠻語を誤て聞て此物より轉て唱へ來る事ありやむくん又  
大人後々至る妄と臆説をなすハ和蘭語の轉聲ある歟といふ  
考ナリ然モ蘭船渡来より以前の名とわざれバ今此に  
舉るやも及ばず又大人さあをひそく一證を得るとの給へ  
一兩年已前一種長大の鐵煙管を得給ふあるハ羽州山形の豪  
民某の家より二百年をうり傳へる物ありどぞうとを見るよ其鐵の  
ちくらくる形状實ゆもさる年來の古色いかあを異國傳來のやう  
和製の物詳々あもぐと一あとよ二百年の前を煙管未どひるま  
と常々思ひよなべを更よ理會ぐく然ども此器今存して世ふ  
顯ハヨトキハ煙草傳へ初より其管もまてよひく一事ある  
器至て厚く太くて重く又吸口の上五寸ちうの所よ鍔ひすれ  
手よ握るがよも似く今世のよく日夜煙うるさる事ある  
甚不便のものなり若く形を煙管それども鐵棍などの用をあら  
るものやと思ひよ其後右よい坂上地院慶長私錄の中  
亦一證を得る

十四年己酉の條云文化十二年乙亥まで此項荊組皮袴組とて徒者  
京都より充満を五月中搦取之七十人餘なり行籠者令乳明正者

共人ともひと又普く喧嘩けんかをうけ後被改さへかわる之組頭ぐみとう四五人成敗殘せいばいざんる者ものハ指さしして  
斜とがよりよ一旦とうじんの知音ちいんまでの儀ぎ間ま被寬ひやん之組頭ぐみとう名なと  
りもの者ものなりなる荆組きのぎぐみとと人々ひとびと喧嘩けんかをかくす依よてなしぬけ荆組きのぎぐみハ室町慶むろまちけい元げんの條じょう  
或人もとひとへよ皮袴組ひはきぐみとと荆きのぎゆゆも劣おとこるの儀ぎなりなる依此儀そしきたゞとを  
さざめくさざめくる右うの徒者どしゃくももととよりよ組ぐみあると云いきせんせん大おほして腰こし

ささー下人げしんもも鳥持とりもち侯こう云い

西鶴さいかくががける物ものの本ほん印いん天和二年てんわにねんよよ小鹽山こしおやまの名木落花なぎりはなららせき今いま却しかしととあく  
けんやうととり男達おとこだつ其その頃頃ハ捕手つかて居合あいあ云いく西鶴さいかくハ寛永十九年かんえいじゅう九年の生れありのうれあり其その頃頃と鳥部山とりべやまの  
煙えんとも五ごくつぎの吸啜管くちくわん小者こわざよへうとと毛け曉あ看かん切きるびひくことことあざあざららる云い  
又寛永正保かんえいじょうほ時代じだい錢湯風呂せんとうふろの古圖こずゑを見みるよよ其その頃頃を常つねよハ煙管えんかんををづづくくぞ  
故ゆゑよ丈たけりり長ながくくききせるの頭かぶ鷦けいの首くびよ似そくる故ゆゑよ鷦首けいしゆの名目殘のこりりりくく大皿おおさら  
りりと大きおおきき一いつ右うよよ抄出さし西鶴さいかくががける書かたの中なかよよ五ごくつぎのききせせるととひひよよああききあるべべーーととひひる者ものいいアア又また右うの長管ながわんよ中なか着きののどどききくくとと入いを結むすびびつつる料りょうややああべ  
ひひすすて山形やまがたの鐵管てつわんよよ鍔つばののどどききくくとと入いを結むすびびつつる料りょうややとと或人もとひといいアア

此實記じじきにてちちどどれてれききとと此こ頃頃よよききせせるももひひ其その名なハハき  
せせるとと呼びよももたたくくして又また近ちか頃頃山形やまがたよよ出でるる鐵管てつわんもも其その頃頃  
のの物もの小こて當時とき惡少年おとこひどいじみやうの玩物あそぶもの小こて鬪爭とうそうの爲ためよ設たてけけることこと  
ああととす

圖づ下しもすありやまぐ山形やまがたよよ出でりりののちち免めん見みる時とき專せんら吸煙くわいんももののややりり  
ああどどくく或もハ鐵てつ提つの用ようををああせせるるものものああとと思おもひひ愚考ぐかうややも果としててああく  
ああとと又またととをを此こ時とき其その最さい初はじよよべべーー但ただし一ひとととはは鐵てつ煙管えんかんをを以もつて喧けん嘩かををげげるる具ぐとななせせ故ゆゑよ聞きゆゆかかううききせせるる鍔つばもも必ひししりりすするる新しん見み老お人のの説せつを見みべべ

又またあれあれつきつきててききせせるるの名義めいぎの愚考ぐかうひひももうちうち長崎詞ながさきこと人ひとを  
打う事ことををききせせるるととりりよよききせてせてややももききせせううけるけるよよりり

右舊記のごとく當時鐵煙管を人を打川爲よ設け置しもの  
あれぞ却て人をさきせるものといふ和語ゆてもひるだきう但し  
されど亦的證と云なづこ

關東史思よきせるとふことひりきせるとひりきせるとひり  
義ひりもと他よ物をひつむかげるねむの意もひりと長崎の詞す  
あらある脣きう醒きの考よ羅山文集み曰當時ハ葉と刻て紙と貼  
くあ色を捲て火を吹き其煙を吸ひ其後ハきせる用ひて紙と鉛を以て  
きせるの製ハ或も鉛を用ひ或も竹を用ひとと盛る事と鉛を以て  
作る牛翠花の形のあくと見えしよすくて考らればらう竹と鉛の  
類をきせてはくもるやゑきせらうといひへがきせると呼ぐる事と  
あらべとひりからう竹の事正編又詳あり其頃づけの鐵管もひり又  
卷と等もひりばされとくもくと形あしを時の詞よきせらうとも  
りひ一考されど今ごときもせよと唐土より渡せりりよ微ひく  
様ゆきけぞひきだきうあれ又一考となむべ

又煙管と野作の詞すせきんがうといふ木のじくすつけの長き

もの下てきせる形をかゝ上下孔を貫く其名義詳よせうだ  
叔奥川民間下て煙脂をせると呼ぶ是亦何の謂ひゆること  
ともあらもひせはせとせるとひ義を鑿と探るの意ひ  
欽然もひ煙脂の筒中よ溜をせと出るものゆゑとせるともひ  
かうべ夷言のせきんがうもひひはせとせうのこうゆうがうへ  
和語の棒杖なるゆゑ

正編中煙草よひうる事盡く載せて遺漏もきがごとく唯古來  
通稱のきせるの名義未だ正しき證を得まと恨んで後の識者を待のう  
叔きせると織田信雄の時よりはやく今の世の製の如きものひり  
と見ゆちのうか友人の方より示せし者ひりもとハ浮世又兵衛

卷之三

六枚屏風の人物の傍よひる煙管の圖なれど

摸圖下

此浮世又兵衛が父ハ荒木某といひて云ふ本名を改めて母方の苗字を  
名乗岩佐と称せ成長の後信雄は仕へ浮世繪を画き出遂に  
妙手となり名譽を得より故ニ世上よ浮世又兵衛とも呼べると云ふ  
但後の人又兵衛が名をみどりよりつむのありとぞしきけを右の屏風の  
繪の鑒定よりをし人の贈とくまとを出せども

落穂集より曰文のう爲の作なり我等善年の頃或老人の物語仕候ハ

たゞこと申ゆのち古來無之侯處天正年中南蠻國の土産の  
草杯小ても可有之侯哉以前の儀ハ煙管杯張る細工人もあらず  
侯故直段等もむづづく未くの者ハ求め申儀也成兼侯が付竹  
の筒のひと先よめをあえ大よ穴をひけ先の方と大皿よ用ひてたゞと

つき吸申候とすり其をばは西國よりをやり出へ中國五畿内まで  
も専らとてをや侯得共關東筋よ於てハ煙草を給侯と申義と  
誰も存せぬ侯所よりつの程ゆう段々とすり出しきせる仕る細工  
入なども多く成侯を以て竹の筒煙管ふど申物もすり候す  
件の老人物語仕事する事小候然とばくどこのちやう初と申ハ  
その久敷事の様ふと不被存侯云云

静廬が藏本百物語卷之下九ある人たゞとをもすり此人のひとく  
をひとくゆゑ十損ひとくとて十首の歌をよきあぐりひくのとよのよれども  
其歌よひとく云く一二三の字をかくよ取て其第十首の奇よ

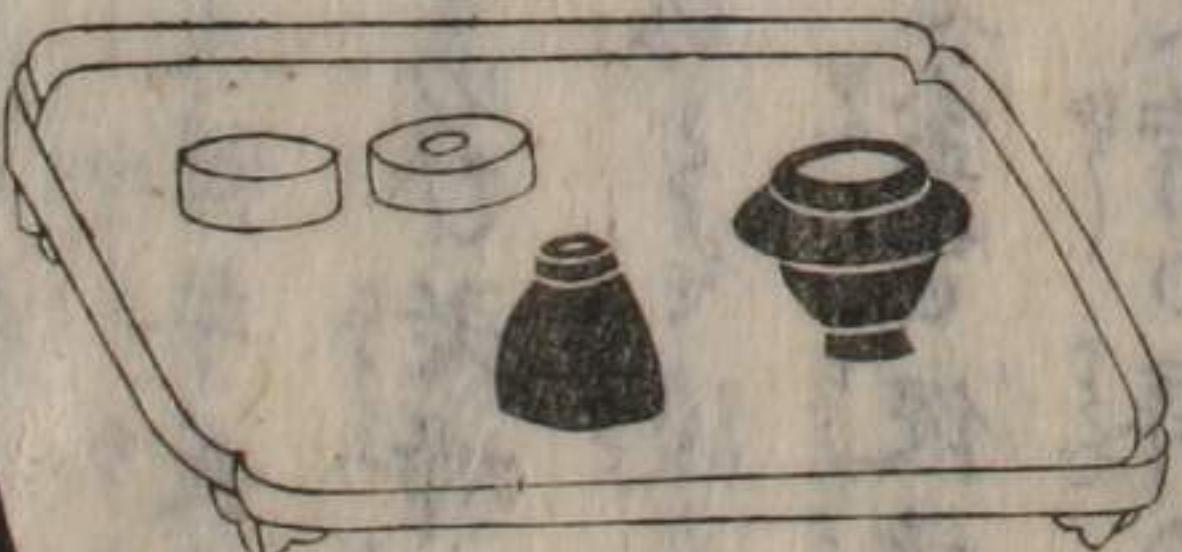
千えのあととハあてのむくはたゞとあまよまるなぐまくとくか

寛永の頃土佐  
光益が画きたる  
やとこせ。さうり  
くもろよ長  
煙管を持せ  
くる圖

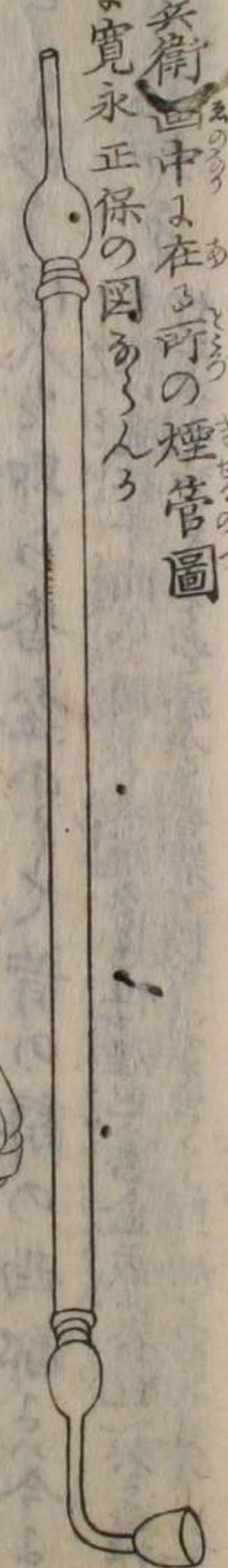
寛永の頃ハ入々長煙管を  
用ひ外曲の時ハ奴僕も  
持せず其頃の人錢湯  
風呂に入りて歸ると此のまゐを  
画きよる。又此圖ひし其僕従  
のそと抜てあくよ摸を但し、髪のみぞれま  
其頃入湯の時ハ女をあらかが故うりとぞ

浮世又兵衛画中より在所の煙管圖  
按よ寛永正保の圖

寛永の末用ゆる煙金の  
模圖  
按よ香盆ゆるべ



羽州山形民間より得る所二百餘年前の鐵煙管  
長曲尺壹尺一寸八分 重五十月  
此處ハ煙包を附ゆる孔のありと  
煙管ゆるべ



未は于時萬治二曆初夏上旬松長

板

上

之

卷

を見ざれば作者の

名知るべからば大人入害の論又先づて此歌吟を暗よ含むものあり  
茶盤とひのきのを謀て香具をとりひもをすといふ 香具を取ひて用ひ  
とすより盆ハ即ち香金火入ハ香爐喉壺ハ炷爐壺煙包ハ銀葉匣盒の前

ニ煙管を二本おくを香箸のをすらうなうとぞ後々よりより今

書院もどと盆といふ様の物出来ると也大人徃年長崎よ遊學給

ひ一時土俗もどと盆の事をかうがんといひ老婦女なども客

来もどもかうがん持てまことひもども度もとひ吏も

持て來のあくびと聞やかうがんハたゞと盆を促呼と覺ゆ

冷笑せよかうほんを即ち香盆少して昔の辭の西鄙よハ今よ

残モソシ四知を香盆の更徃年間氏よ聞一も本説の北祖煙色香盆或ハ香包外は長

新見老人むろしく物語よ曰老人ハ享保年中八十歳むろも懷中た

をもとひ事うてなくじよしとさきとてふくの多葉粉

盒よひるゝととのひありのをもと今とくに違ひて亭主坐敷

出るまでのまば亭主物語してまことにまつとちのる容ハまづ

亭主よすまいと盆茶のらきのおとく二三度りふ其時亭主

ちゆふ紙を唇ぎてきざるを取ひをもとひきせるを紙ふく

拭ひ是ゆて恭れときせるをさへ出ほ客取てひらきのんで

たゞよくもほしも一ぬくも二あくも吸つて拭て我前に置

歸る時分ちゆふ紙ゆて拭ひと盆へ入り暇乞へてひら拭小

時亭主其ままで置れよといふ近年まことに吸す中々左様よ

印貰ひをう 千萬なり。若し亭主頭役、老人ねがふを  
たなこの先と有ても、ござりとてのまば。其頃うるをあきや川こと  
ひもく人も六やう。うでぞて、いをほくを入もりんぎんのざへき  
又ハねやう老人の前ゆゑて、うるのむ入なし。うるを入をもく取  
おどくても、私のゆゑハ無之とりそくからを事うり。其頃のうる  
入ハりゆひ、青もす紙をりくら又吹き画墨流し。かどしる  
隨今鹿相なるうるを入がり。今も金入の切。どんも。あちん。  
色々々のうるを黒塗高蒔繪。梨地をどふして自慢げよ。指出は  
夫故ゆゑて入賣もる事夥。

近頃輪池屋代氏より自ら薑炎小言と題せる寫本一冊を借

與へ。其書中より説く所を見ると、延寶天和貞享の頃の隨筆  
にて盡く流行出せし煙草を憎む諸説なり。堅くあると廢を  
辱きの憤激の雜論數十葉。繕成せるものなり。あるとを  
是迄なくして、み一品のいはすれて云々。且始てのを習ふ人、又  
其性よりともするもの、醉ひ仆ひなどを見て甚ざふくみ  
遠ざけしなる。

又南畠太田氏の藏書印本愛煙草詩歌と題せる一書を見  
る。元祿四年宮本氏某の撰。前書より反して煙草ハ閑居  
茅窓より伴ひ風雅の遊情をたもむるものとあると愛翫  
自ら樂多る詩歌などを何とぞく愛憎の相反する其好ゆる

ものも深く愛賞し又其性よりもして憎多るものばかりあるを  
遠ざくる事甚し

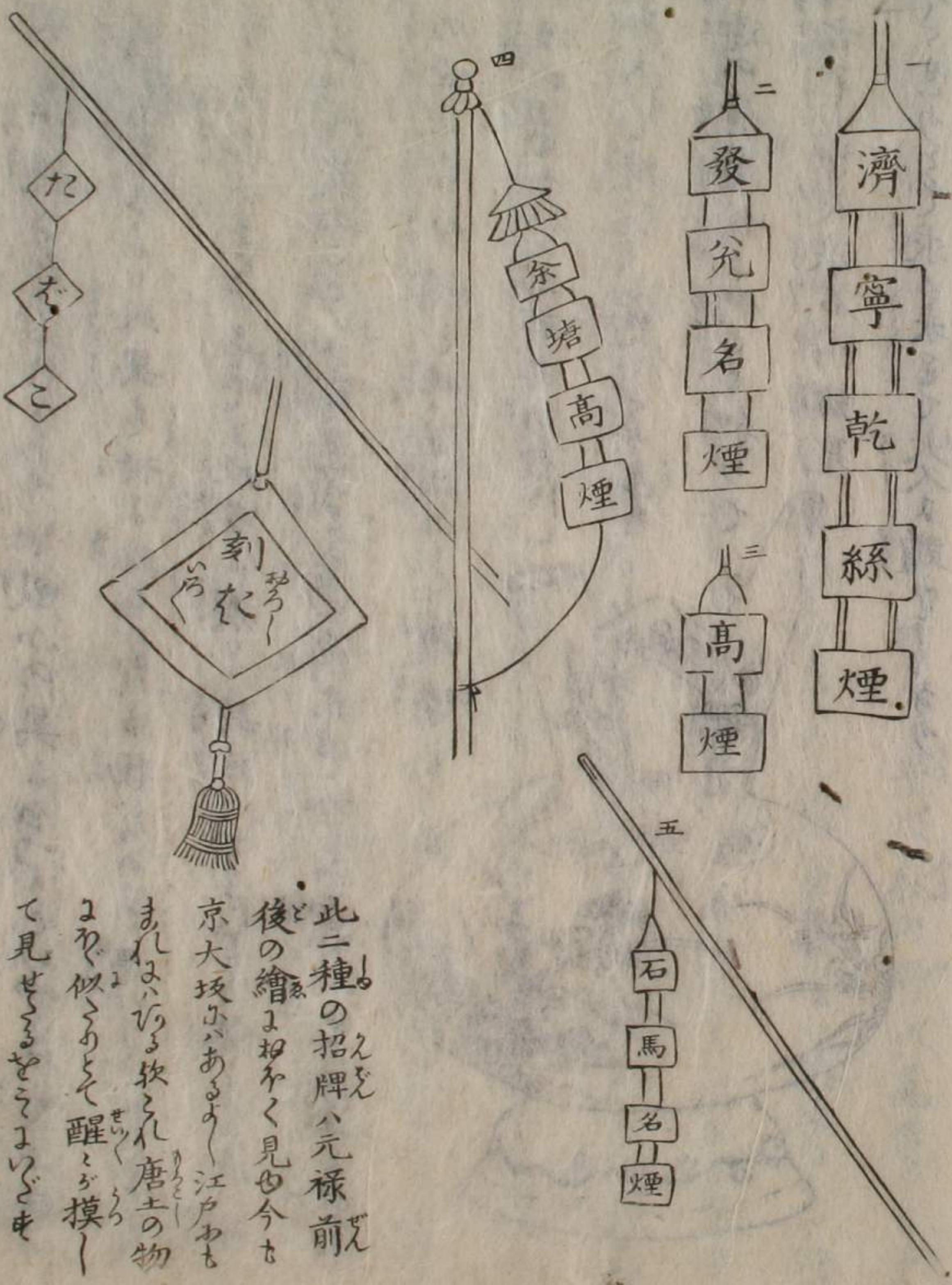
千種日記天和三年の記行の書 詳細

大坂の商人の許より人をうめく  
衣服部あるとどうや名づけてもしくあうともよ入てをうきり人を  
してきどませてきゆくもくある物ある有るゆきりともみて  
此國の名をえくる物ありとひねりて此くまととひふ物百と  
せうみとひきつゝゆわめて中略あうとひれと今世中ア  
もほりて京江戸のひつあるゆきりのあれ 数あうと思  
ふがれても中や上野國より多く紀ひもとさりとも  
とて名物有りの國は小松。木のふくろ。信濃國。けんこ。井上。  
りくさう。ほり。りくとき。かどく。有みのうや。田代。あだ。仙東。あういし。  
そくすうちの國。ひうちの國。大和國。よしのくに。丹波。よし山。  
あうちやま。伊豫國。よしのくに。阿波の國。よしのくに。丹波。よし山。  
名物。ひき。越中國。よへつう。とく。長崎。みや。青。あお。白。しら。とく。  
有みやう國。くまを名を得る多うは。今。の。世。甲斐。みなかみ。とふ。昌  
吉。を。往。年。保。己。一。檢。校。を。抄。錄。して。大。人。贈。も。な。す。按。此。天。和。三。年。癸。酉。  
す。今。文。化。の。十。一。年。ま。ち。ち。百。三。十。二。年。と。此。時。も。よ。諸。國。小。ま。ご。の。  
名。物。有。書。中。よ。れ。わ。か。此。く。が。と。ゆ。物。百。よ。せ。こ。の。く。云。こ。と。ひ。れ。を。世。よ。専。ら。  
見。え。向。井。氏。の。煙。艸。考。わ。其。名。も。出。て。又。他。の。國。の。名。産。の。名。も。出。せ。ず。延。き。  
世。よ。い。う。と。此。等。の。く。う。い。の。と。ば。の。國。産。の。數。く。種。類。夥。き。事。

二百年。あ。の。く。異。朝。か。威。よ。だ。も。あ。の。く。諸。書。よ。見。え。真。假。

益露。頭黃。二黃等の名有。益露をとくら葉のことを聞ゆ。刻もいと  
 を絲煙。縷煙。乾絲烟。又金絲煙など呼べ。又閩の地より植へと始  
 こへて其後四方よ遍く。尤もとを佳品とし。燕産あれよ次ぎ  
 浙江石門を下りて又浦城建煙。清寧余塘石馬などいふを  
 其名産と見えて長崎へ持渡す。絲煙の色紙を見えり  
 大人の親へ見らるゝを

和漢煙舗招牌の圖



此二種の招牌ハ元禄前  
 後の繪よねなく見ゆ。今ち  
 京大坂小山より江戸や  
 ましはひむ软れ唐物  
 より似たりと醒くが摸し  
 て見せらるゝをよいども

異國ハリミ 一リ種チ 之シの 吸スすを 吸スふの 具イ 有アリ 有アリ 正セイ 編ヘン 有アリ  
其圖ハナフ を 載スル と 此具ツク を 世セ に 珍シらう なる 物モノ なりと 思スル と 有アリ と  
百有餘年ヒヤウヨウジン の とき まで は 北方ヒガタ に 渡スル と 其用ヨウ ひくと て 傳スル や 磁ヤキ  
器カケルモノ 小コトコト 此圖ハナフ の ごとく 作スル と 有アリ と 有アリ 全マツテ く かつカツ なナ す や まきマキ

今ヨ の 世セ は 古今利カシマリ と 呼スル 品モノ 有アリ 繪エ 様ヨリ 七

其頃アリ の あられ ば 二百年ニヒンセン の むじ

あされ 用スル ひくと 見スル あり あち  
浪速ナガズ の 骨董舗カウドウブ 何モ とも 知ル て

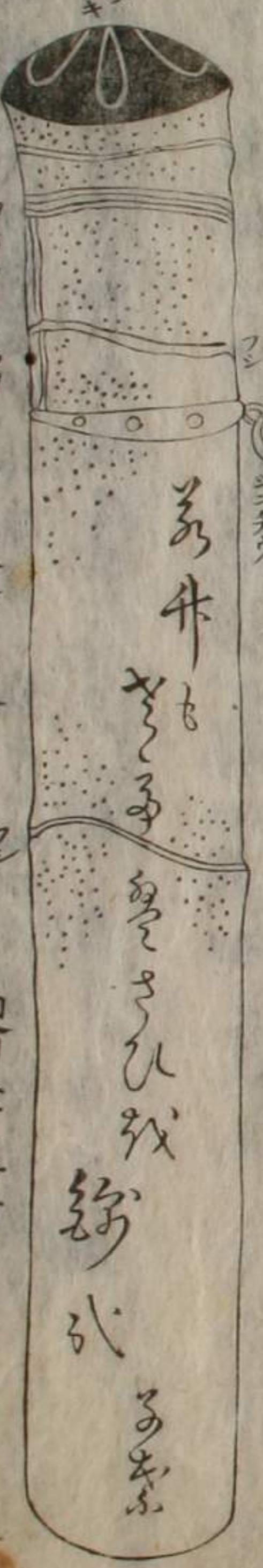
持ハサフ 古レ 大浪オハラ 石川イシカワ 君君 見スル

ひくと そ 求スル 大人オトコ 贈スル す



尾花オハラ ことト 曰スル 本居宣長ホンジカンナガ が たゞの わゆハシ 草ハシ は 秋アキ の 野ノ 尾花オハラ と  
たゞとト 中略チヨク 未條ミタケ ようくの もつモツ いくひヒ かカ と 云スル 猶シカ とト て  
りの あや あよ ふねハシ きハシ ゆも まハシ 物モノ ひハシ ゆも やも 大ハシ く は あきハシ ぎ  
えを なされ う 常ハシ は げハシ だく あハシ きハシ りの と あハシ く と あハシ く と いみ  
し と 願スル そ も の つ ねハシ ぐ て 七日ハシ か 十日ハシ か ど まハシ る おハシ く と い み  
めハシ 常ハシ は げハシ も 柄ハシ ち ぬハシ 此君ハシ の 一リ 日ハシ も あハシ て は いハシ ぬハシ と ば あハシ し と い と 記ハシ

○ 山東軒サンドウケン 所藏チヨウ 赤穗アキハラ 義士ギシ 大高源吾タカタケンゴ 忠雄チヨウヨウ 俳名子葉シヨク が おま竹タケ の きせハシ ふ  
荷ハシ 有アリ 元祿ハシ の 背ハシ の 物モノ と 知ル ば 其圖ハナフ を あよ 模ハシ し 出ハシ す



ワヌアリトウラ  
モソテマク

長八寸五分

三寸五分

萬升ハシ と  
多喜ハシ と  
錦ハシ と

萬升ハシ と  
多喜ハシ と  
錦ハシ と

静廬北氏の藏書閑話隨筆は載る妙法院宮をとの徳  
七種きりとの給ひ一御言葉を煙葉と象て書がる圖

の門徒ハ誰々開初座

宮御言葉聲なくして神氣をさすを能む者  
有也其德と云ふ也

按よ本書何人の作なる事とあくべ一

我磐水大人の雋錄を編集し給へ此草の濫觴と主治功害と詳  
皇朝の人異國の人中示し給んと素意厚情なり然るよ編中に雅  
賞詩文煙具の諸圖等よ至るまでを雜集し給へる故よ全編を熟  
讀ざるをもとて其諸圖の卷を見てある偏よ好事者流の雜  
著の如く見なぞ輩をいふと然きどもととまるごひみハひく思  
がり抑我大人其本志の大いに趣意といふもとから太平に  
生きりる人々空しく其天年を損する事少くんを患ひ全部  
三巻の通編を總括其常よ思ふ所を以て巻尾よ於て懇よ説き  
給へるを附考又餘考といふものあり然れどももと又かく文字  
よ綴れて通俗のよひよしとばらを讀み曉解との少に歎

あよ於て大人の不學文盲なる愚夫愚婦までも諭し示さんとせば  
深情の本意を知るとの稀なるも亦遺憾となり乍ら夫此物ハ其  
功と害の相半する物なるを以て世の人をして貴賤を分ふを心と  
用ひ過服さるを以て其の的證を引きて新よ八害の  
説を立て痛く戒給ひ乍り年々かく盛よ行ひて皆  
人の口腹小によく刷毛染を事故今ハ昔のきぬゆ似ぞ古人の  
深く戒免且惡をぬる程にもゆくぬや叔味噌など煙毒を解を  
きのをなと先輩もづく今も試みて知る所あり幸ひよ我國  
の人も朝夕此物を飯食よ添へ食へる故よ覺えびあを解毒を  
る事なるべくまで西北よりくる島の七八殊さるよあをと  
好み愛むとあはゆるがちよ樂みをそひふとゆをそひば其の  
とゆをあきふされば寒湿の氣を避けぬせぎざき故あすされば  
雨風とも侵れわき浪をもあきげて漁る魚をりて此乾葉と  
ある事とぞかの長城を越えて西よりくる韃靼蒙古の境  
より支那より送る交易の品々の中ふと此煙草第一の物也又東  
北の野作人などハ煙草を喜ぶこと甚く珍しく品を贈らるもあ  
然とば今も餘考中よ深く戒り論じ置をのこめゆるあぐく  
又卒うよ改めざきととおりあくと人々よく其源を辨へ知る  
頻もよ用ひ過モ事を用心し又短管を用ひるがごときも時々

あきをさへ改めて新とよな。煙脂多きりのを用ひざる  
やうふも心うけよう我家よ在るとときも長き管なるを用ひよと  
の戒を守るべし。これ皆吸ふるものとの論なり。これよつきて  
圖らばも詳よ開け出へむ。生乾草の薬功ひる事あり世に  
こそとよからん人そきくの製法を加へ。新よ病小施し用ひあら  
あき古よがき所の一箇の薬草起らすとぞりべき。

本朝食鑑よ曰。胸膈と通し。胃口を開き鬱を拂ひ悶を破る  
憂を消し飽ると解き。齒牙を固く。二便を通じ能一身の  
氣をもてらしと上下しことを運轉し。ことを發散せしむ  
煙氣ハ聚りを薰灼の毒ひり散ぢ。又發達して其痕を  
と火の負け勝ちの害を受ぞと。

今世人々煙草を吸ひて煙を吐く漸く咽喉の間よりす  
胃口までを至らばして出つ若し遺る薰もひるときも湯  
水の味噌汁をのれば悉く下よ降みて去る盡もあらず故よ氣  
と火の負け勝ちの害を受ぞと。

### 和蘭煙草の主治

粘液濁飲を疏利する事を主る藥局中やくおほくの製法  
を施して諸病よ用ひるものひりその傳來の始ハあくべに唯  
歩卒役夫の輩。勞疲飢渴の時よひりて一吸ひきて暫時  
快きことを取れるものなりと。

按よ東方の諸國よくハ今もいづるよ朝夕あくす事のみあれども

彼國ハ此草の本性を考へて藥治は専ら用ひること左のどく也

煙草を性酷烈油氣と塩氣り、かなもち吐下の峻劑なり。癆及癰瘍不仁或ハ暈倒昏冒或ハ上氣或ハ呼吸急迫等の症を主治モ又水銃方藥中少もこれを入モ用シ又鷦ぐとときハ嚏と止ム一切の創傷浸淫惡瘡等凡此物外科方中より配合する之の急と緩免瘀腐を除く等の事わきて効ひ。

此物の功をあそい全く製法の塩と油より一體胸膈の痰滯と疏通を惣て諸惡液内より蓄て諸症を生ずる者これを服して甚効ひ。

葉の味苛く嘗ミバ舌頭よりみぞまよが如き辛烈きものぞ擇ひ取モテ藥用とあそべー其主治ハ急と緩免瘀腐を除べ能く金瘡を愈モ或ハ其瘡久しく愈モ變トテ翻花をあら者或ハ墜墮撲傷或ハ蟲獸蟹傷の又上氣面赤眼目翳膜の諸症又殺蟲功也。

風寒より属する頭痛或モ手足疼痛を葉を取モ炙モ其痛所より一二遍も置モ甚効ひ。齒痛や青汁を取モ布巾より浸し其触痛の所より置き或ハ細末をあし傳けても亦よ。金創諸部より被るものを久しく治しへきものよときて効ひ。あをとつとんとも前より先酒を小便を以て患處を洗ひ細布を以て血を拭ひ淨くしてあをとにくら。胃虛して水穀消化をき者又生稟胃氣弱き者此物一二

葉を取る大よりアリ。阿禮襪油アラヒタマオを和ハ能研合せ腹の上胃の部位カニに置く大いに功あり。又解毒劑ゲヅクザイにてなをひすひ。毒箭ドクヤの中も血逆チカラバて出で止まるもの。斯スのごとき功アミ行ハシマる故リカ。軍陣カミに出る時ハ此青汁アキモトを器物コツハに貯ハシマへて持行ハシマき。其不慮の備フジとなむ。青汁アキモトかそれば乾葉シカモトを用ハシマるも亦可なり。

葉厚き物と擇ハシマひ取ハシマる石臼シロウに入ハシマき。杵ツガにて其汁アキモトを取ハシマる。腹の上脾の臟の部位カニに按ハシマて脾の固結カツカツる諸症カツカツを融解トクダ。或ハ細末ヒカルとなくハシマし。或ハ膏コシヤとハシマし。或ハこれを貼ハシマるも亦佳ヨシ。

胃痛ヒカル疝痕ゼンカ。其餘寒カク暑カク属ハシマする者。或ハ風氣ホウキを帶ハシマる者。此葉アキモトを温ヒルえて其患ハシマ上ハシマよおけハシマ。諸痛速ハシマく退ハシマく。或ハ屢試ハシマて。

葉アキモトを取ハシマる。關節疼痛カイケツヨウズ。諸症カツカツ。毎朝食前ハシマよ一二葉アキモトを噉ハシマり。粘唾ねだきつまを吐ハシマて。其患ハシマ即ち除ハシマく。大飲飽食ハシマ腹脹滿ハシマ。者二葉アキモトを取ハシマる。熟灰アツカイを其内ハシマに包ハシマ。暫く其氣トウキを透徹トウセツ。是を腹の上ハシマよ掛けハシマ。其脹ハシマ即ち解ハシマく。葉アキモトを石臼シロウに入ハシマき。杵ツガにて漉ハシマし。過ハシマし。乳汁チカラと砂糖シラカバとを加ハシマへ。水銃スイロ注ハシマ肛方カウハウに用ハシマゆ。

冬月小兒踵カニガスられ蠶カニコム蝕カニコムきのよつけハシマ極ハシマめて効ハシマ。刀創骨カツカツは透ハシマる。者あらを施ハシマく。數日小ハシマして能肌ハシマを生ハシマく。きび口カニコムを歛ハシマむ。

諸潰瘍カニム蟲カニコムを生ハシマる者。此汁アキモトを塗ハシマる。速ハシマく去ハシマる。金創カツカツ未ハシマど日ハシマを経ハシマ。其毒アキモトも深ハシマく。此汁アキモトと渣ハシマとを取ハシマる。患處ハシマを塗ハシマる。忽ち愈ハシマめ若ハシマく。其毒アキモト深ハシマきのハ先酒ハシマを以ハシマて其内ハシマ。

注ぎ入と此汁を棉布<sup>きり</sup>に浸して創を覆一を日なぞして

全く治毛た創の内外を淨らすも愈

乾葉<sup>きさく</sup>も亦其功用少<sup>すこ</sup>ば留飲の諸症<sup>ゆうじやう</sup>を其よく乾きる物を取<sup>と</sup>て細末<sup>ほそ</sup>を香爐<sup>こうろ</sup>の内<sup>うち</sup>に於て焚<sup>たき</sup>其上<sup>うへ</sup>に轉注の

土<sup>ど</sup>を<sup>とき</sup>を掩<sup>おおふ</sup>其管<sup>かん</sup>の所<sup>しょ</sup>を病者の口<sup>くち</sup>に<sup>つけ</sup>て其<sup>うち</sup>を受<sup>うけ</sup>此の<sup>あく</sup>されば夥<sup>うしろ</sup>く粘痰宿水<sup>ねんとうしゆすい</sup>を吐出<sup>ぬ</sup>して即ち愈<sup>ゆ</sup>

又水腫<sup>みずしゆ</sup>を療<sup>む</sup>するや<sup>う</sup>前法の如く少<sup>すこ</sup>て唯<sup>ただ</sup>其<sup>うち</sup>を

覆<sup>おおふ</sup>せ病者<sup>びょうしゃ</sup>の口<sup>くち</sup>を開<sup>ひら</sup>て直<sup>す</sup>其煙<sup>えん</sup>を呑<sup>の</sup>み水氣<sup>すいき</sup>を消<sup>き</sup>すあり子癪<sup>こえん</sup>の症此草<sup>このくさ</sup>を以て両股<sup>りょう</sup>横骨<sup>よこ</sup>の邊<sup>へ</sup>を薰<sup>かぶ</sup>せ其苦<sup>くさ</sup>を止<sup>む</sup>

乾葉<sup>きさく</sup>を粗末<sup>ほそ</sup>とす火<sup>ひ</sup>を點<sup>とも</sup>し鼻<sup>はな</sup>より嗅<sup>にお</sup>ぐりを鼻煙<sup>はなえん</sup>と名<sup>な</sup>く

其功甚多<sup>多く</sup>殊<sup>こと</sup>能<sup>め</sup>く脳髓<sup>のうすい</sup>閉塞<sup>ひさい</sup>を開<sup>ひら</sup>き嘔<sup>く</sup>を發<sup>は</sup>して其蓄<sup>たま</sup>所<sup>し</sup>の痰物<sup>たんもの</sup>を瀉<sup>の</sup>出<sup>だ</sup>すもあ<sup>ま</sup>故<sup>ゆゑ</sup>感<sup>かん</sup>胃<sup>いん</sup>頭<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup>等常<sup>じつ</sup>用<sup>ひ</sup>

て速<sup>はや</sup>功<sup>こう</sup>を得<sup>と</sup>るなり人々<sup>ひとびと</sup>盒<sup>はこ</sup>子<sup>こ</sup>貯<sup>たま</sup>して常<sup>じつ</sup>備<sup>そなへ</sup>べ

又頭<sup>かしら</sup>痛<sup>いた</sup>を治<sup>の</sup>むや<sup>す</sup>此草<sup>このくさ</sup>を齒<sup>は</sup>一箇<sup>いつ</sup>の煙<sup>えん</sup>を吸<sup>の</sup>ふ間<sup>ま</sup>少<sup>すこ</sup>して其痛<sup>いた</sup>を除<sup>の</sup>く葉<sup>は</sup>を杵<sup>き</sup>爛<sup>らん</sup>らし諸<sup>よ</sup>腫<sup>しわ</sup>瘍<sup>よう</sup>を貼<sup>は</sup>ま<sup>せ</sup>則<sup>ま</sup>よく膿熟<sup>うとう</sup>モ

綠葉<sup>りょく</sup>を取<sup>と</sup>て蒸<sup>あら</sup>露<sup>らう</sup>罐<sup>ざな</sup>にて蒸<sup>あら</sup>して其露<sup>らう</sup>水<sup>みず</sup>をとすあ<sup>ま</sup>を硝子<sup>さうし</sup>鑊<sup>なべ</sup>の内<sup>うち</sup>に貯<sup>たま</sup>一置金瘡<sup>きんじやう</sup>或<sup>も</sup>腫<sup>しわ</sup>瘍<sup>よう</sup>の<sup>ひ</sup>冬月<sup>とうげつ</sup>跟<sup>くわん</sup>腫<sup>しわ</sup>爪<sup>つめ</sup>甲<sup>こう</sup>指<sup>さし</sup>腫<sup>しわ</sup>るものを此油<sup>このゆ</sup>を棉布<sup>きり</sup>に浸<sup>ひた</sup>一患處<sup>かんしよ</sup>を覆<sup>おおふ</sup>一を忽<sup>こつ</sup>ち愈<sup>ゆ</sup>ゆるなり又此物<sup>このもの</sup>を取<sup>と</sup>て膏藥<sup>こうやく</sup>を製<sup>せい</sup>せば其功<sup>こう</sup>前<sup>まへ</sup>說<sup>いつ</sup>く所<sup>し</sup>の生<sup>なま</sup>汁<sup>じ</sup>一味<sup>いつめい</sup>を用<sup>もち</sup>るものをも<sup>う</sup>勝<sup>まさ</sup>らす今<sup>いま</sup>

あくよ出へ示せ

煙葉

潤大色青綠  
膩氣なるもの

九拾六錢

葉ごとよ布巾を以て汚きつきくる砂土等を拭ひ淨らし木臼の内ふて杵きゝがらく水を加へて其青汁を取て右量目程の内よ 家豬脂交玉混ちる筋膜等の者を去て清潔にて四拾八錢を和へよく拌せありと銅鍋より入を微火小て煎煉し水氣盡き宜きを得る硬きよならざるを度ともべ

此方ハ主治金瘡或ハ潰瘍岩痔癰疽等諸般の惡瘡よ貼り能汚を清く急を緩う一痛を和らげ肌を生む又他の膏藥

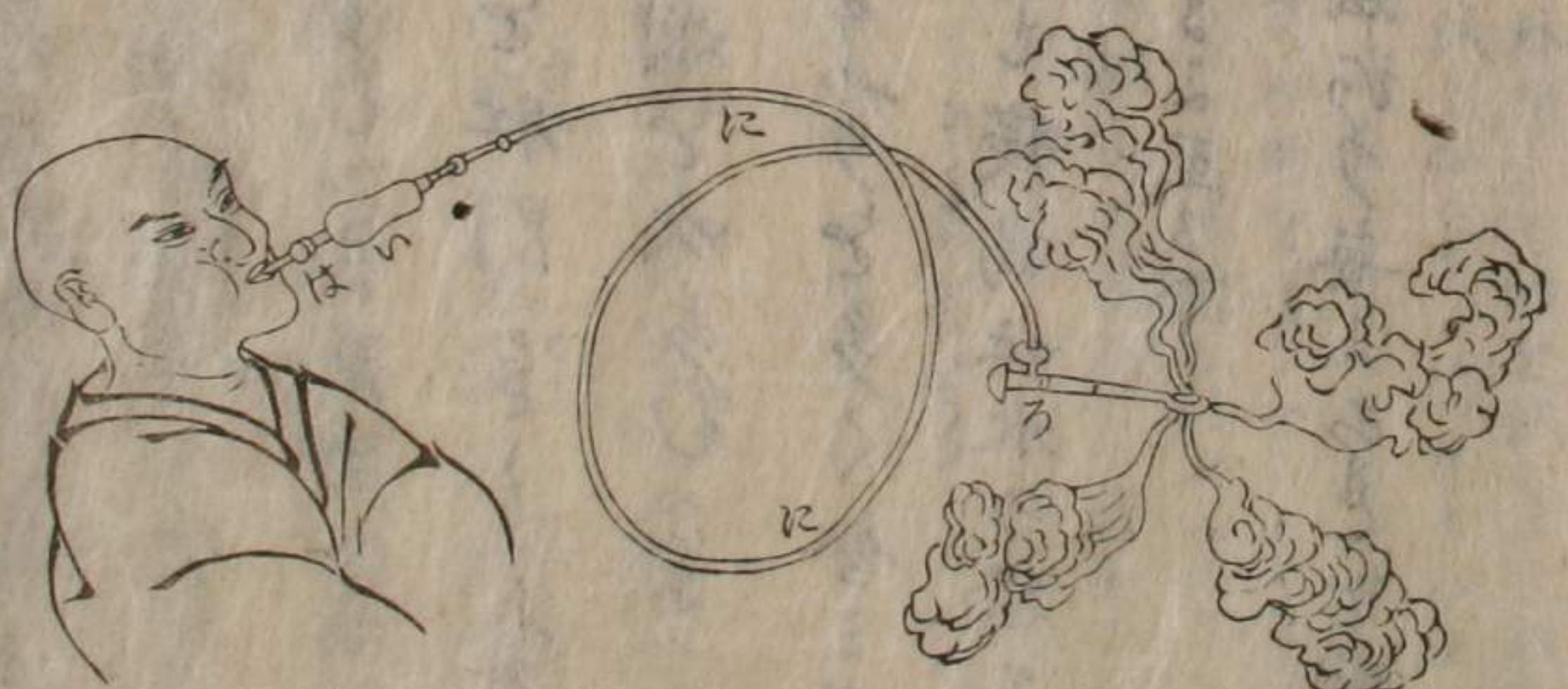
方中よ合せ

溺死を救ふ法

近頃溺死を救ふ簡便方を得た。此患も亦バ救ひざれど此術開けて後死を免るもの多一と云ふ其法ハ即大頭の長煙管を用ひ縷煙を盛り火を點く其火頭を口よ含て其煙を肛門より腸中よ吹入をなり再三あきを吹き第四五度よ至て口一もよ含名す煙を一氣よ吹入るかくのまくをなすを腸中雷鳴をや程なく口より水を吐出次但其水ハ僅よして腰脹乍ち減消して重生なりをとある。溺死の人のやる水ハもづくよ食道胃口の間よひるをのゆり然とども呼吸の常道を壅閉するを以吸氣下よ推送る事なきよ氣息をとめ胃と腸の間よをとづり舍かる空氣升降の度を失ひ次第よ鬱滯して胞脹をのひれて

全く腹内より水の充満するを以て此の吹煙法ハ煙草の辛辣  
氣を以て其腸中を刺戟し從て能く收斂し且其氣下膜  
の諸筋及胃腑鬲膜より連及んで腸中自然の動機を促  
催さしむるよりて胸膈を寛豁し呼吸を俊敏せしむるより  
此療法近ち爲一良書より新譯せるものあり板注肛水鏡導法の  
一法ニ直腸吹煙の器ひアキモ便秘の症より施を法アリ其方術も器具  
セテ之をもとづく人の書中より出せア常の煙管を用ひんよりハムにて此器  
を作成て其用を待テ尚便利あるべし

### 肛門より煙を吹こむ圖



間合なるべし此邦のきせるよてハ  
犬頭小きく管も短く且ひつき  
少もたゞるべし常より此器を造る  
備置を便りとぞ  
ちも亦うよ摸せり時より臨で  
此器を用ひと貴人婦人と  
いとも其下體を全く露はしり  
ぞそその術を施すも便利あり

△造法ありびよ用ひ

い印ハ鐵或ハ銅よて阿蘭陀煙管の大火頭のぢくにくる  
其内ニ刺したを盛り火を点す辛くて強きに印をその  
火皿の底ニ接する草を作らるたゞじづき長筒あり印  
の象牙の小管ニ接せ即此牙管を肛門より入る上の  
は印の火をよつけ小管より烟を吹きしなり其吹  
氣を先一息吹入と二度目ハ氣を多く含ミ一息  
ニ強く吹きしなりあても一息ても腰鳴吐水の容子あり  
時ハ又右のあく吹きみ其効を見る至る  
又喘息病ニ煙草青葉修合の一良法あり毎ニあきを試るに  
極めて効ありあり略せ

此等の譯説皆生草或ハ乾葉を取れて内服外用にて功を試みるの方法あり  
あきハ常用の薰煙の外の事少して和漢の之を試み知らざる所なり今此新試の  
譯説を見るときハ人々日夜の薰灼をあきハ尤心を用ひべきことありさて此草本来ヒ  
主療を詳々辨し醫俗を論せず自ら試みて其功用を逞りせし無益の異端も  
云々然殊ニ今ニ至り世よ夥しく有觸るものにて諸國の村里より得や  
めく且ナキやを便法あり又前法の外ニ彼國嗣出の藥局方書中ニ數々の  
方法も見ゆバ志士人ハ尋求てよ

### 唐土吃煙の功能

煙草の味ハ辛く氣ハ温かくて性ハ毒ありあきを吃ハ寒と温と  
より發る病を治し胸中の痞悶と痰の塞みを消し經絡の結  
滯を却く其専らある功ハ四つあり一つは醒れハ能あきを醉しも  
ありハキの大氣薰蒸して表裏皆通徹し酒とのあく如くあれハ  
なく二つある是を醒もありハ酒後も啜ハ氣を寛げ痰を

又あれを吸へば頭目を利く 風邪を解く 悪氣を逐ひ百病を  
去る身を強く健やす  
△煙脂ヤニ 能蛇毒を解也

煙  
脂

按ニ試ミテ煙脂少許を取モ蛇口（アシカヒメ）に入モキバ其脂の氣其身（アシカヒメ）はあももと  
次第ニ肉の色変ドつひニモテ死（アシカヒメ）モナリ又蛭（イヘビ）の人の身ニつき  
ムヨコモを（アシカヒメ）レバ忽ち死（アシカヒメ）モ農夫泥田（アシカヒメ）ニ入る者蛭（イヘビ）の取つくをきケン  
トキモハ脛ニ二三ヶ所脂を（アシカヒメ）テ入れモ必トヨツク事ナ（アシカヒメ）と云

吉士のりふも此物の功ひるゝを氣の甚辛烈故火を得て  
燃も其煙氣を吸ひ其氣喉中のどに入るバ大よ能く霜露風雨  
の寒を禦ふせぎ山蠱鬼邪さんこきよの氣を避さく小兒こどもあきあきをのりのりを疳積えんせきを  
殺さく婦人此をのりのりば能く癥瘍きゆうを消きモ氣滯きど痰滯えんど一切寒  
凝不通きずつうの病びやうらきの此こを吸のバ即ち通むぞ

の寒を禦ぎ山蠱鬼邪の氣を避く小兒あきのりを疳積を  
殺す婦人此をのせば能く癥瘍を消し氣滯痰滯一切寒  
凝不通の病ゆるもの此を吸へば即ち通む  
又一書は能く瘴氣を解く最霧濕を消し其霧濕の毒  
とひもひも海より起る山瘴の氣ハ山より盛なり其盛より行ふ所よ  
てこそ此煙草の藥勢火の力を借りて行らむ事なり如斯辛き  
味のものハ先肺臓より入る遍く経絡より走る故に微風暴寒を  
立とひよ吹き散らべ又能強て榮衛を行らる驟より閉  
塞を開く寒なる者ハ暫く熱せしを飢るものもこれぞして  
暫く飽くえ倦む者ハあきをして暫く健なむも車よ

のを馬の騎のと行く人風雨霜雪の中の往来くるまゐるもののハ少すくなし  
用もちひても其功ごうハ至いたて速はやなるものの小こくてちいさくより便べんあるあるハ少すくなし  
故ゆゑよこそを喜こむものの至いたて多くなるものとともいども能のぞ病びやうよ當あつるあり  
用もちすととばかく熟毒じゆそくののとともいども能のぞ病びやうよ當あつるあり  
膿窠とうくわ疥さい蟲ちゆうを洗あらはひて妙めうなり此物このもの世人じにん終身用もちふととを厭うらがむをを  
りりををりりつて病來くるる嗜のみのを病愈いゆとる

明ときの時滇とくさんといふ地ぢを征伐せっぷかし深入しんいつして瘴瘴地ぢよ入いるる小  
軍士ぐんし皆病びやうよ染そめそそ其中うちかかて一つの陣營ぢんやう中なかのの其患きげんな  
すきすきすきすき絶ぜつええを煙えを吸くひひ故ゆゑががすきすきをきて扱あつかひ  
此物このもの瘴氣じやうきを免めんすきすきのあありりとと徧へんく遠近えんきんよ傳はへへ人ひと毎まいよ

すきすきを服はむ事ことよなれなれたりよれよれ寒さむ濕陰邪しづいやと穢氣けいき  
を避さけ蟲ちゆうを殺ころす功こうあありりをななり又汁じゆよ搗うき用もちふば頭風かしらのかぜを除よくよ其性きせい純陽じゅんようなるものの能のぞ行ゆらら能のぞ散ちむ功こうあありり

右漢わ人の主治じぢ諸說よせつ皆驗とうか之の知しる所ところにて疑ひひひ寒國さんくに瘴じやう地ぢの人ひと

又其地そのよ行役ぎやく人ひと尤おほ航海こうかいの人ひと等とう闊はくべべくく要品ようひんなるなるべべ

### 和漢煙毒わかんえんどくを解わかせ方かた

枳榔

煙毒えんどくを解わかせせ

又泥漿ねいじょうを用もちて藥くすりよ和あわせ用もち也可よ

砂糖

此毒このえんを解わかせせ

又麥門冬ばくもんとう知母ちぼ山枝さんし花粉はふん黃芩こうけい

蘆木

甘草かんぞう爪蔞仁くわくじん枇杷葉びぱよう

右九味くじみ煎せんして渣ざを去はなす沙糖さとう一兩いちりょうを和あわせ用もち可よ

向井震軒むかいしんせん曰煙草えんどうを多服たふして眩暈めまい頭痛とう惡心おきするする味增汁みそじを

飲人で即愈の急汁をとるゝハ燒味噌を食ふも亦よく煙管と脂の  
塞るものを味噌汁を以てとほせを能通ぢあまらずとも其解毒する  
事を知り又脂の衣服を汚すも味噌の熱汁をさしげ即ち淨し  
此餘の諸方法のひるあと正編より詳あれど我邦そハ味噌汁を飲んで  
あきを解むるあと極めて妙法か。他あきよましくるものひるあり。さう

禁忌

以下の漢説皆 薫煙の  
習俗をいまとやうり

陰虛吐血肺燥勞瘵の人ふらり用ふあとなれ偶これとのむこと  
ひきバ其氣閉悶昏憤死せるものあとし善物とあらざる事  
知る。あくべたり陰虛不足の人ふらり宜しく。所以なり

按あるようきハのとて其性よ合ちぞといふ人やうて右よりの陰虛不足等の  
人かやうり人扱後やを甚ど嗜む人やうてその習ひのとくは昏憤するもの

三十二

甚多し又初め右の變を覺えむも一射其性よひバつひのとく剰きて  
口絶するも至るあつを其性よひを各別の害もあき事ふも各好んで  
のじとりども人々よりて多ツハひるありあるときハ専ら内よ得ると得ると  
差別ひる。又婦女子ハ男子より多服せぬうえに田舎の婦女いたれど異多  
醫意商とり書ゆる平人ふくして酷き。あきを好ふと深く戒  
め。盡せざる但しあれを用ること既よ少くして功微あり毒も

又微なり云々其教深切なりとりふをし

此餘和漢の諸書皆過服して人よ益なき事を説き其説大同小  
異うれば正編よりあくやう其簡要なる事のみと載り  
和蘭諸書曰煙を吸へたれどハ醉て睡眠をなすより又頭脳を  
攬動てあきが為よ精神錯亂をこれと此草の熱性甚しき  
故なり又多くあきを服されば氣力を減耗し  
又口よも吸ひ鼻より薰ふるも多きよ過れば頭脳を攬擾し

必ず氣力を耗らし 知覺を失ひといふ

一書此物過服せし必も害あり記憶意識を損し或ハ音憤眩暈と發せあきハ他の故より少く能く神經よ透徹して真氣を耗消せ以てなる世人あきを省みて常用のものとなへ暫くも手と口と離さむ余を以て思ふ恐くハ強壯なる者として怯弱なる遂も其天年をもむる

なぐん攝生の人よく省思ふをとぞ

此餘和蘭の諸説大同小異正編は盡せりもあきハ薰煙の過服を戒めなき漢説と相似て又實理の精を加ふるものなり

目次草終

清ゆ事主人處事つへ内記考其根  
附解一本清上梓來い是ら正猶ミ  
御里共に清ある事浮心老也行文  
御未矣老也行文殊ふ可仰也以人  
令字すも因清もと因ほは向志校  
ふ考之事乃壁ある事校也以拉乎事  
字すも以清事もあきを有と爲考之  
事害へ及へ歟等子考もと爲

予及紅鷗家酒。才子之刊此也。  
以爲吾一派。自小之世。已歸如此。  
之一。浦。非是吾之心。但欲教汝打擣  
竹之傳也。

曉里抱朴子

國頤

友人竇唐忘主



